

豊田市民芸館だより



木綿地藍楊梅染松皮菱紋卷上絞広巾
片野元彦 1963年
昭和38年度日本民藝館展 日本民藝館賞受賞作

目次

- ・特別展「藍染の絞り 片野元彦・かほりの仕事」準備レポート … 2頁
- ・本多静雄の民芸を探る -技術者の視点とその業績- …… 3頁
- ・令和4年度展覧会より …………… 4・5頁
- ・民芸の森から …………… 6頁
- ・令和3年度事業報告 …………… 7頁
- ・民芸館からのお知らせ …………… 8頁

第33号

特別展「藍染の絞り 片野元彦・かほりの仕事」準備レポート

参考文献 『片野元彦作品集 絞と藍』 草土社 1999年
『名古屋民藝』 第2号、第3号、第17号、第22号

『民藝』 788号 2018年

9月13日(火)～12月4日(日)の間、特別展「藍染の絞り 片野元彦・かほりの仕事」を開催します。本展は、藍染絞りの第一人者として知られる片野元彦(1899-1975)の絞り染作品に加え、父・元彦の仕事を献身的に支え続け、父の死後も真摯な仕事を生涯続けた絞り染作家の長女・かほり(1932-2016)の作品を展示します。また、書簡などの関連資料、親交のあった写真家・藤本巧撮影による元彦・かほりの写真も併せて紹介します。

片野元彦は名古屋で生まれ、若い頃は画家・岸田劉生に師事し、洋画家を目指していました。岸田の急逝後に染物を学ぶようになり、昭和31年(1956)有松・鳴海を訪れた日本民藝館創設者の柳宗悦(1889-1961)に、産地である有松・鳴海の絞りの仕事を再興するよう託されたのをきっかけとして、藍染絞りの道に専念するようになりました。このとき元彦はすでに57歳でしたが、元彦が図案を考案・下図を引き、長女・かほりがその下図によって括りや縫いを施すという二人三脚で、絞りの仕事に邁進しました。



編集作業をする元彦とかほり
昭和46年(1971)

片野元彦と名古屋民藝協会、有松・鳴海について

昭和31年(1956)10月25日に名古屋民藝協会(以降「協会」と表記)が発足、柳は11月27日に開催された協会主催の映写会に出席し、翌日有松・鳴海を見学しました。藍染の仕事がかつての堅実さを失いつつあるのを憂い、また、アフリカ等の諸外国への輸出に力を入れ、むしろそちらで愛好される状況を鑑み、染色に携わっていた協会員の元彦に、有松・鳴海の藍染絞り再興を示唆しました。元彦は長女・かほりとともに自らの絞りの仕事に打ち込む一方、協会が「民芸としての有松絞り」の製作を試みた際には、古い絞り資料や当時の輸出品等を調査、綿生地を選定・デザイン・染色・絞りのあり方など民藝関係者の指導を仰ぎながら、有松の職人と連携し量産化を図りました。それは、協会が1周年を迎えるにあたって柳から掛けられた「民芸協会が只趣味にのみかたよる会であってはならない。その土地の生産を育成し、指導してこそ民芸協会の意義を発揮するのだ。」との言葉を受けてのことでした。

元彦は有松・鳴海の絞りについて、「何とかして力一ぱい努力して勉強いたし度い、そして何物かを寄与したい、これこそ私の残生をかけての最後の願いとして一心になりました。」と柳の意向を体現、元彦のひたむきな情熱は、日本人が改めて有松・鳴海の絞りに再注目する契機となりました。
(岩間千秋)



昭和32年(1957)4月23日 有松・竹田家書院にて
左より加藤恭太郎・河井寛次郎・棟方チャ・棟方志功・片野元彦・竹田嘉兵衛・
林弥衛・竹田知加子

竹田嘉兵衛(のち協会員)は有松に店を構える老舗製造卸問屋(現・株式会社竹田嘉兵衛商店)の店主で、片野と有松の職人らを結ぶ役割を担いました。

写真はいずれも藤本巧撮影

特別展関連企画 記念講演会「片野元彦・かほりのこと」

日時 10月22日(土) 午後2時～3時半
講師 藤本巧(写真家)
会場 第3民芸館
聴講 無料(ただし会期中の観覧券の提示が必要)
定員 30名(事前予約制)
申込み 往復はがき、またはホームページの講座申込みフォームで、10月4日(火)までに必着。
往復はがきの場合は、往信裏面に企画名・参加者名・住所・電話番号を記入。
(1枚のはがきで2名までの申込み可)

片野元彦が絞りを始める前の作品
「紅型打掛」昭和41年(1966)を、
10月22日(土)午前9時～午後5時、
第3民芸館において1日限定公開
します。観覧無料。



本多静雄の民芸を探る —技術者の視点とその業績—

本多静雄の民芸—集積の美・集合の美—

本多静雄(1898-1999)が民芸と出会うのは、昭和20年の12月、日本民藝館を訪れたことがきっかけです。柳の民藝の考え方に共感し、瀬戸の焼き物などを中心に民芸品の収集が始まりました。

しかし、全面的に柳の考えを受け入れたわけではありません。例えば、柳の心偈「見テ知リソ、知リテナ見ソ」(まず直観を働かせて得たものを、後から概念で整理せよ 概念から直観を得ようとしても無駄である。)に対して、本多は「知リテ見ソ」(概念から直観を得る)という考え方です。これは本多が理系の技術者であったことが大いに関係しており、「知識経験を離れた直観というものは存在しない」とまで述べています。

また名古屋民藝協会会長であった本多は独自の新たな民芸を発見します。それは、「集積の美」です。瓦屋根、千本格子、型紙小紋や竹ざるなどのような、繰り返し文様や構造や多要素の集合の美ともいうものです。電気工学の集積(IC)に因んで名称が付けられたもので、京都帝国大学で電気工学を学んだ、技術者・本多静雄ならではの見方なのです。このほか、円空仏、狂言、郷土の食なども民芸ととらえていました。



本多コレクションの円空仏 本多の民芸「集合の美」
昭和58年4月に開館した豊田市民芸館(第1民芸館)は日本民藝館の大広間を本多が解体・運搬し、豊田市に寄贈。豊田市が建築。同時に円空仏の展示コーナーを大広間に増築した。展示構成は本多の考案による阿彌陀来迎図をイメージしている。円空仏の台座は余った移築材を転用した。壁面の絵は円空の絵を複製したもの。

技術官僚 本多静雄

本多静雄は、戦後、日本電話施設(株)(現・NDS(株))や(株)エフエム愛知などの創業者として知られ、電気通信関係の実業家として活躍しました。今回は戦前の技術官僚の活動を紹介することで本多静雄の民芸の背景を探っていきます。

大正13年7月、京都帝国大学電気工学科を卒業した本多は、通信省に入省し、東京の本省工務課に配属され、ヨーロッパへの無線通信の業務に就き、依佐美送信所(刈谷市)の建設に係りました。大正14年には名古屋通信局に異動となり、東京・大阪間の長距離ケーブル布設の仕事や名古屋の電信電話線路の保守建設の責任者となりました。

昭和3年に昭和天皇が伊勢神宮へ行幸するため、おはらい町に現場打のコンクリート製電信柱23本建てケーブル配線を行った現場担当者でした。

ドイツ留学

昭和10年7月、本多にドイツ留学の辞令が出ます。本多のドイツでの仕事は、電信電話での国際会議への出席や昭和11年開催のベルリンオリンピックにおける通信関係設備について、昭和15年に開催される予定だった東京オリンピックのための調査でした。また、オリンピックの写真を日本製の写真電送(今のファックスのこと)で送信実験を行いました。

なお、ドイツへは船旅でした。行きはインド洋経由で、途中エジプトのピラミッドを見学し、帰りはイギリス経由で大西洋からアメリカへ渡り鉄道で横断し西海岸から太平洋を渡り帰国しました。留学中、欧米の工業技術の見聞を深めたことでしょう。



本多が伊勢から移築した
コンクリート製電信柱
(民芸の森)



ベルリンオリンピック開会式 朝日新聞
昭和11年 写真電送実験による写真。
各社撮影の写真を本多が選び送信した。

技術者運動と「科学技術」の言葉をつくる

昭和12年1月帰国後、歴史的な社会運動となった技術者運動を起こした一人として、本多は参加します。技術者運動とは、官公庁で法学系職員が身分上優遇され、理工系技術者が冷遇されていることを是正しようとするものです。

この成果が表れるのは、本多が関わった技術院の創設の昭和17年1月です。この頃の本多の経歴をみると、昭和13年通信工務局省試験課長、昭和16年興亜院技術部長、昭和17年技術院第一部長です。技術院は、内閣直属の組織で異なる省庁が所管する「科学」と「技術」を合体させ、国家の科学技術の刷新向上を図ることを目的する組織でした。本多は「科学技術」の言葉をつくるのに奔走したのです。また、「参技官」の職位が新設され、本多らが就任します。これで技術者も局長級の勅任官になることができました。

しかし、本多は病気により昭和18年10月に退官し一時、豊田に帰郷します。昭和19年9月、電力の鬼といわれた松永安左エ門が創立した東邦産業研究所(埼玉県)の理事長に招かれました。ここで、本多は松永からお茶の手ほどきを受け、茶道具一式をもらい、茶道研究会に入りました。

冒頭述べた本多の日本民藝館訪問は、この茶道研究会の会員として参加しました。ここから本多は民芸の収集を始めるなど、民芸運動に参加し、推進していくのです。
(児玉文彦)

令和4年度展覧会より

企画展「雑誌『工藝』の美」展より

6月7日(火)～8月28日(日)／第2民芸館

昭和6年(1931年)に創刊した雑誌『工藝』は、思想家の柳宗悦を中心に編集刊行された民藝運動に関連する唯一の機関誌です。本展覧会では、雑誌『工藝』全120巻を一堂に公開し、この出版活動の総体を紹介できるよう構成しました。



第2民芸館展示風景

雑誌『工藝』の魅力、それはまず何よりその装幀の美しさにあります。雑誌そのものが「工芸的な作品」であるべきという考えのもと、各地の和紙や織物を積極的に用い、手触りも含めた質感にも配慮して装幀されました。雑誌の顔というべき表紙は、年度ごとの担当者が毎月異なる意匠で作成していきます。創刊初年度の表紙は、芹沢銈介がデザインした型染による布表紙で仕上げられた、極めて斬新で完成度の高いものでした。以後、2年目は吉田璋也による因州木綿に芹沢デザインの題字、4年目には森永重治による安来織に柳・河井寛次郎・濱田庄司デザインの題字、6年目には柳悦孝による織りに芹沢意匠の型染などと、装幀に関しては非常に凝ったものでした。また7年目以降の多くの号に関わった鈴木繁男による「描漆・型漆」の表紙も異彩を放ちました。毎月「1000部もの部数の表紙を鈴木自身が漆絵(つまり手描き)で制作したことについて、柳が「追従を許さぬ仕事」と評したほどです。



(右上から時計回りに) 第65号、第81号、第58号、第1号、第118号、第100号

雑誌『工藝』のもう一つの魅力、それは編集の獨創性にあるといえます。誌上では毎号、柳らが新しく見出した工芸品が次々に特集されました。各号それぞれに扱う工芸品を定め特集し、取り扱う範囲は日常の工芸品のみならず、家屋や絵画などにも及んでいます。地方の産地の紹介、歴史の記述、生産技法の分析といった豊富な情報に加え、小間絵や写真図版を十分に活用して編集され、図版のトリミングや印刷、活字の組み方にも毎号工夫が凝らされました。文章の空いたスペースなどに入れられた小間絵は、民藝運動に参加した同人作家らが担当し、写真撮影と製版の多くは、柳の著作の図版に数多く関わった写真家の坂本万七、西鳥羽写真製版印刷所の西鳥羽泰治が担当して、雑誌を工芸作品と考えていた柳の理想の実現に手を貸したのです。さらに誌面の構成において特筆すべきは「現物提示」という取り組みです。挿絵では再現できない性質をもつ布や紙について、現物を貼り込むという贅沢な試みをししばしば行ったのです。例えば第28号は島根県の出雲紙、第91号では山形県の米沢織物の現物が貼り付けられ、繊細な風合いをもつ和紙や織物の良さを直に伝えるにはこれ以上の方法はなかったといえるでしょう。



(左) 第106号 (特集: アイヌ織物)
(右) 第107号 (特集: アイヌ木工品)

柳宗悦ら創設メンバーによって昭和6年(1931年)1月に創刊したこの雑誌は、戦中戦後に止むを得ず一時発刊が途絶えましたが、多くの協力者を得て順調に刊行され続けました。しかし資材と資金不足のため、昭和26年(1951年)1月の第120号でやむなく終刊となります。ほぼ毎号に執筆していた柳の文章をはじめ、他の同人による様々な文章や座談会の記録、あるいは「鳥取通信」「島根通信」「たくみ通信」といった地方からの活動報告や、巻末の「編集後記」や「雑録」に記載されている活気ある同人同士の交流などを通読すれば、この雑誌が同志のネットワークの中継地点として人どものや情報をつなぎ、民藝をひとつの共同体としてまとめ上げる場として機能していたことがよく分かります。雑誌『工藝』は、その時点の同人たちの手仕事の集合体であると同時に、民藝運動がもっとも活動的であった時代の空気が残された格好の資料なのです。

(都筑正敏)

「暮らしのなかのガラス」展

5月31日(火)～7月31日(日)／第3民芸館ギャラリー

明治～昭和初期に人々の暮らしのなかで用いられたガラスの器、卓上・吊りランプなど、デザイン性に富んだ華やかなガラスの道具を豊田市民芸館の所蔵資料から紹介しました。透明なガラスに鮮やかな色ガラスを被せて大胆なカットを施した切子、透明ガラスにあぶり出し技法でさまざまな文様を乳白色に浮き出させた氷コップやコンポートなど、かつての庶民の暮らしを彩った日本のガラス製品の多様な魅力を肌で感じられるよう展示も工夫しました。



第3民芸館ギャラリー展示風景

特別展 全国郷土人形展(仮称)

令和4年12月17日(土)～令和5年5月7日(日)
(観覧料 有料)／第1・第2民芸館

郷土人形は、江戸時代中頃より節句物、縁起物として日本各地で制作されました。庶民の間で身近な紙、木、土といった材料で作られた人形には、暮らしの中の祈りや願い、憧れが込められたのです。本展では、京都・伏見人形をはじめ、宮城・堤人形、山形・相良人形、福島・三春人形、埼玉・鴻巣人形といった各地の特徴的な作品を紹介するとともに、愛知県内における代表的な土人形の産地である名古屋や三河、犬山などの代表的な作品など、素朴な美しさをたたえた全国各地の郷土人形を紹介します。



東北の土人形

冬から春のイベント報告

○初春のお茶を一服 令和4年1月22日(土) 参加者:48人

民芸の森の管理棟内の和室から初春の景色を眺めながら、同日に始まった「森の本多コレクション展 第4回 日本六古窯-常滑」に関連する茶器を使用して行いました。コレクション展のギャラリートークも併せて開催され、展示とお茶席で作品に対する理解を深めることができました。



民芸の森の景色を眺める参加者

○市民文化講座 青佳談義(第10回) 令和4年2月19日(土) 参加者:37人

「民芸」や「本多静雄氏」について知りたい方、学びたい方を対象とした講座「青佳談義」を3年ぶりに開催しました。

節目となった第10回目の今回は、当時、本多氏の秘書であった長瀬稔氏から愛知県陶磁資料館・豊田市民芸館の設立にかかわったお話を中心に本多氏の業績のみならず、文献だけでは知り得ない、その人柄について語っていただきました。



講座の様子

○文化講座「本多静雄さんの業績をたどる～戦前の技術者編～」 令和4年3月26日(土) 参加者:7人

本多静雄氏の戦前の技術者時代にスポットをあてて、当時の資料映像を交えて業績をたどり、理解を深めていただきました。

○森のアート展Vol.16「野田宗憲 陶芸作品展」 令和4年4月29日(金)～7月10日(日)

豊田市民芸館講座「ガス窯陶芸講座」、民芸の森「こま犬を作って飾ろう」講座の講師、野田宗憲氏の陶芸作品を紹介。釉薬の調合や釉掛けの技術により生み出された色の濃淡、模様の美しさを楽しむことができました。

○初夏、森の手ざわり 令和4年5月15日(日) 参加者:約500人

3年ぶりに「矢作川流域の交流の場、そして地域への広がり」をテーマに、NPO法人民芸の森倶楽部と共働で開催しました。

舞台での演奏や展示、出店などを行い、地域住民の交流や憩いの場となりました。



出店の賑わい(母屋跡地)

夏から秋にかけての予定

※詳細は民芸の森HP (<https://www.mingeikan.toyota.aichi.jp/mingeinomori/>) 及び年4回発行の森暦でご確認ください。

○民芸館コレクション展「新作ガラス工芸」7月16日(土)～9月4日(日)

民芸館が収集した資料の中から、現代の作り手の技と美が融合したガラス工芸作品を選定し、紹介します。そのほか、豊田市出身のガラス作家新實広記氏の作品を特別展示します。

○体験講座「こま犬を作って飾ろう～民芸の森の土で色付けを楽しむ～」

講座開催日:9月3日(土) 展示期間:10月22日(土)～12月4日(日)

こま犬を一对作陶し、民芸の森の土で色付けして焼成。焼き上がったこま犬は管理棟で展示します。

○森のアート展Vol.17「藍染めに魅せられて～なみ工房の仲間たち」9月23日(金)～12月4日(日)

民芸館講座「絞り染め・藍染め講座」講師、加藤南美子氏とその仲間の藍染め作品を展示します。

○民芸の森 観月会 10月8日(土) 予定

「月見・灯り」と「おもてなし」をテーマに舞台、竹行灯や俳句の展示、カフェ等出店を予定。

今年もNPO法人民芸の森倶楽部へ運営委託をして行います。

○本多静雄ゆかりの地を巡るバスツアー 10月21日(金)

今年は、名古屋および岐阜県関市方面の円空仏を鑑賞し、本多静雄氏との関わりを学びます。

○勘八峡紅葉ウォーキング 11月19日(土)

民芸の森を発着点として平戸橋公園の紅葉と秋の勘八峡の景色を楽しみながらウォーキングします。

令和3年度事業報告

民芸館年間入館者数

25,345人(311日開館)
(2年度 19,330人/279日開館 *新型コロナウイルス感染拡大の影響により4/11~5/17臨時休館)

特別展・企画展

特別展1回、企画展2回、関連展示1回開催しました。
各展覧会では、体験、ギャラリートークなどを開催しました。

◎企画展

「植物文様の民芸」

会 期 3月9日～8月29日
入 館 者 4,291人
(令和3年度分133日間)
関連企画 ギャラリートーク、
染色体験、染付け体験、
茶室でのイメージ和菓子販売



◎豊田国際紙フォーラム「IAPMA展」(第1・2民芸館)

*主催は、豊田国際和紙フォーラム実行委員会
会 期 9月7日～10月17日
入 館 者 3,402人

同時開催「日本の紙と世界の紙展」(第3民芸館)

会 期 9月7日～10月17日
入 館 者 2,196人

◎特別展 *日本民藝館からの巡回展

「柳宗悦と民藝運動の作家たち」

会 期 10月26日～1月30日
入 館 者 4,538人
関連企画 ギャラリートーク、
上映会、関連グッズ販売



◎企画展

「新収蔵品展」(第2民芸館)

会 期 2月8日～5月29日
入 館 者 1,435人(3月末現在)
関連企画 ギャラリートーク、
絞り染め体験



同時開催「手仕事の優品展」

(第1民芸館)
会 期 2月8日～5月29日
入 館 者 1,719人(3月末現在)
*豊田市美術館「サンセット／サンライズ」連携展示

民芸館講座開催

定例の講座と団体利用による出張講座を行いました。

【講座参加者数】

[連続講座]
穴窯陶芸教室 参加者数 147人
ガス窯陶芸教室 参加者数 579人
染織教室 参加者数 383人
絞り染め教室 参加者数 341人
拳母木綿教室 参加者数 639人
トンボ玉教室 参加者数 450人

[体験(親子・成人)504人]

ガス窯10回 穴窯陶芸2回 トンボ玉3回
絞り染め3回 裂織2回 糸紡ぎ・機織り体験2回

【団体 利用件数・参加者数】

ガス窯陶芸3件 絞り染め3件 呈茶2件 見学1件
勉強会1件 合計244人

【民芸体験・参加者数】

穴窯陶芸、こま犬づくり、ハンカチ染体験、しめ縄作り
計6回・91人

刊行物

「民芸館だより」第31号・第32号

資料収集

吹きガラス大皿、三河拳母手紡木綿着尺購入。和紙、郷土玩具、画集、絵画、型絵染、屏風などの寄贈。
令和3年3月末で収蔵資料数は12,151件 55,156点となりました。

資料・写真貸出

資料貸出1件/企画展「<画壇の三筆>熊谷守一・高村光太郎・中川一政の世界」(富山県水墨美術館)へ「熊谷守一作品《ともしび》」他 計4点

友の会

会員数54人(3月末現在)
友の会通信発行4回(112~115号)

民芸の森

年間入館者数 19,974人
イベント/観月会10/16、勘八峡紅葉ウォーキング11/20
体験ワークショップ/「貼り絵でミニ鯉のぼりを作ろう」ほか8回
森のアート展/「紙絮一苦～紙のある暮らし～」ほか2回

民芸館からのお知らせ

① 拳母木綿作品が日本民藝館展で「奨励賞」を受賞しました。

豊田市民芸館の拳母木綿手紡ぎ手織り講座で講師を務める拳母木綿伝承会、その会の一員である服部節子さんの作品「三河拳母手紡木綿着尺」が、東京都駒場の日本民藝館で開催された新作工芸品の公募展・2021年度



写真撮影：高野尚人
『民藝』第830号(2022年2月号)

日本民藝館展で「奨励賞」を受賞しました。今回の受賞にあたり、服部さんから「今後も伝承会のみなさんと話し合っ手わざの向上に努め、先人のものづくりの教えを大切に、地域に根差した、着てみたいと思われるような織物が作れたら、と思います。」とお言葉をいただきました。『民藝』830号(2022年2月号)では、2021年度日本民藝館展が特集されています。

また、令和4年10月29日(土)～11月27日(日)の間には、当館第3民芸館において、「第8回伝承拳母木綿展」を開催します。当館所蔵の日本民藝館展受賞作品や拳母木綿手紡ぎ手織り講座受講生の力作を展示しますので、ぜひこちらも併せてご覧ください。



服部節子さん

② 紅葉ウィーク開催のお知らせ

11月12日(土)～11月27日(日)の民芸館と紅葉を楽しむ紅葉ウィークで、様々なイベントを開催します。

・茶室 勘桜亭の平日営業(月曜日は休業、通常営業は土日祝日)
時間：午前10時～午後4時 料金：一服400円(菓子付)

・民芸館・民芸の森・いこいの広場 3館スタンプラリー
すべてのスタンプを集めたら、民芸館ポストカード、
または、民芸の森クリアファイルをプレゼント

スタンプ設置場所：民芸館(第3民芸館)・民芸の森(田舎家)・平戸橋いこいの広場(受付)
時間：午前9時～午後4時30分 入館料：無料

・勘八峡紅葉ウォーキング2022

民芸の森を発着点とし、いこいの広場・民芸館・前田公園・越戸ダムなど紅葉の名所である勘八峡を巡ります。

日時：11月19日(土) 午前10時～午後1時(最終受付は午前11時30分) 小雨決行(予定)

事前申込：不要 集合：民芸の森 参加：無料

※新型コロナウイルス感染症等の影響で内容が変更になる場合があります。



紅葉と矢作川をイメージした
紅葉ウィークでの絞り染め展示

お問い合わせ 豊田市民芸館(豊田市生涯活躍部文化財課)

〒470-0331 愛知県豊田市平戸橋町波岩86-100

TEL 0565-45-4039 FAX 0565-46-2588

休館日 月曜日(祝日の場合は開館)

開館時間 午前9時～午後5時

入館料 無料(特別展は有料)

<https://www.mingeikan.toyota.aichi.jp/>

豊田市民芸の森

〒470-0331

豊田市平戸橋町石平60-1

TEL 0565-46-0001

